

第一回存在論・形而上学WS

第一発表者：繁田 歩

Short Introduction

存在論の問いと「存在帰結」

存在論の問いと「存在帰結」

存在論の根本的な問い

→「何があるのか？」

→「何がないのか？」

→「何があって、何がないのか」

形而上学的問いであると同時に、言語と論理の問題でもある。

→世界それ自体の实在を前提した哲学から、言語や論理を通じて世界を逆照射する哲学への移行。

存在論の問いと「存在帰結」

標準的な応答

「存在対象はすべて存在し、非存在対象など存在しない。」

→存在に関する同一律による応答

→「存在」の冗長説 (Miller 2002)

別の応答

「存在するものと、存在しないものがアル」

→マイノングの「対象論」や、後代の新マイノング主義

存在論の問いと「存在帰結」

歴史的背景

マイノング (1853-1920)

フレーゲ (1848-1925)

ラッセル (1872-1970)

クワイン (1908-2000)

ストローソン (1919-2006)

新マイノング主義 (1970年代前後から再注目)

存在論の問いと「存在帰結」

論争の歴史

- ① マイノングVSラッセル（&クワイン）
 フレーゲVSラッセル [今回は割愛]
- ② ラッセルVSストローソン
- ③ クワイン主義VS新マイノング主義

存在論の問いと「存在帰結」

論争の歴史①マイノングVSラッセル (&クワイン)

「現在のフランス国王」、「丸い四角」などは何についての表現なのか。→名辞と指示対象の問題

マイノング：どんな表現も対象を指示しており、それは時に非存在対象であってもよい。

ラッセル：非存在対象を指示するように見える記述句は別の記述に分解して解釈するべきだ。→記述理論の成立

存在論の問いと「存在帰結」

論争の歴史①マイノングVSラッセル (&クワイン)

「現在のフランス国王は聡明である」の翻訳

- 1, フランス国王が一人いる。
- 2, フランス国王は一人以上いない。
- 3, フランス国王であって、賢くないものは何もない。

→文の有意味さを認めつつ非存在対象なしに真偽を検討可能。

存在論の問いと「存在帰結」

論争の歴史②ラッセルVSストローソン

ストローソンによる記述理論への批判

→確定記述句そのもの、は存在含意的命題に翻訳できない。

→「表現そのもの」と「表現の使用」は別物だ！

→ 俗にいう「日常言語学派」との連続性。

表現：「現在のフランス国王」

表現の使用：特定の文脈において用いられている「表現」。

存在論の問いと「存在帰結」

論争の歴史②ラッセルVSストローソン

ストローソン：「表現そのもの」と「表現の使用」は別物！

→「現在のフランス国王the present king of France」という表現それ自体が存在を含意するのではなく、むしろそれがどのような場面で「使用」されているかが真偽を決める。

→同一の命題はレイ14世（太陽王）の統治下で言われるか、レイ15世の統治下で言われるかによって真偽が異なる。

存在論の問いと「存在帰結」

論争の歴史①と②について

マイノングやラッセル：本来であれば表現は表現が指示している対象の存在を含意する（少なくともそう見える）。

ストローソン：言語表現それ自体は対象の存在を含意しない。
むしろ存在を含意しうるのは「表現の使用」である。

→Russell1957やVorstag1967による再反論もある。

存在論の問いと「存在帰結」

論争の歴史③クワイン主義VS新マイノング主義

クワイン「存在するとは量化の変項であることである」

→量化の変項となる限り全てが存在し、非存在対象などない。

新マイノング主義「量化と存在は別個のことである」

→自由論理との共通点：量化 \exists と存在述語 $E!$ との区別

→三つの流派がある

存在論の問いと「存在帰結」

論争の歴史③新マイノング主義の三大流派

マイノング主義：「存在対象と非存在対象がアル」

- 1, 二性質説：存在とは通常の性質とは異なる性質である。
- 2, 二繫辞説：存在述語は例化とエンコードの二義性をもつ。
- 3, 様相説：存在/非存在はそれぞれの世界に相対的である。

存在と非存在を分けるような述語がある。

存在論の問いと「存在帰結」

論争の歴史における「存在帰結」

タイプ1（フレーゲ、ラッセル、クワイン）

確定記述や固有名などの表現が指示する対象の有無を検討する。

タイプ2（ストローソン、新マイノン主義）

「xがフランスの国王である」という述定の成否を検討する。

→非存在対象を認めたとしても残る問題。

→非存在対象は存在する国の王様にはなれない！（MM）

存在論の問いと「存在帰結」

存在論的な問い：「何があるのか」への回答方法

→主語の「存在帰結」を考察することで答える。

→述語の「存在帰結」を考察することで答える。

存在を含意する述定が成功するか否かを見極めれば

「何が存在するか」という問いに答えられる？

これは本当か？